



福島まで(新幹線) 大学まで

- 東京から約1時間40分
- 小山から約1時間10分
- 宇都宮から約45分
- 仙台から約30分
- 山形から約1時間10分
- JR/東北本線金谷川(かなやがわ) 駅下車 徒歩10分
- バス/福島駅から二本松方面行き乗車 福島大学下車 徒歩10分

高速バス

- 仙台駅から福島駅まで約1時間20分
- 会津若松駅/バスターミナルから福島駅まで約1時間30分
- 新潟駅から郡山駅まで約2時間50分

茨城方面からお越しの場合

- 高萩駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約35分
- 日立駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約45分
- 水戸駅よりJR常磐線特急でいわき駅まで約1時間10分
- いわき駅より高速バスで福島駅まで約2時間



福島大学
公式マスコットキャラクター

めばえちゃん

プロフィール

4歳の女の子、4月7日生まれ。
出身地 福島県阿武隈高地
性格 のんびり屋 いつもニコニコ
お仕事 福島っ子の応援・福島県産品のPR
福島県の復旧・復興のお手伝い
福島大学のPR

福島大学入試課

公式LINE



入試に関する
お問い合わせ先

福島大学入試課 〒960-1296 福島県福島市金谷川1番地

TEL. **024-548-8064** (平日/9:00~17:00)

※お問い合わせは、できるだけ受験者本人が行ってください。



このリフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい「植物油インキ」
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。

FUKUSHIMA

福島大学
大学案内 2024

福島イズム

UNIVERSITY



この地とともに



学び、歩む。



国立大学法人
福島大学
Fukushima University

GUIDE
2024



この地とともに
学び、歩む。

Fukushima Ism

福島イズム

街へ出よう。仲間と共に地域(フィールド)に入ろう。

ここでずっと暮らしてきた人々の声に耳をすまそう。

それがどんなに小さな声で、実現が容易ではないことであっても。

君たちが歩むのは、まだ誰も歩いたことのない道。

復興への想いと、難題に立ち向かう精神があれば、きっと越えていける。

青空に高く高く、希望の旗を掲げよう。



INDEX

- 01 福島イズム
- 03 学長メッセージ
- 05 福島大学の研究紹介
- 07 forR プロジェクト
- 09 「解のない問い」にチャレンジ
- 21 学類・コースINDEX
- 23 人間発達文化学類
 - 24 社会で活躍する卒業生
 - 25 カリキュラムの特長
 - 27 学類長メッセージ
 - 28 実習ピックアップ・教員紹介
 - 29 コース紹介
- 33 行政政策学類
 - 34 社会で活躍する卒業生
 - 35 カリキュラムの特長
 - 37 学類長メッセージ・教員紹介
 - 38 学びピックアップ
 - 39 1年次の学び
 - 40 2年次の学び
 - 地域政策と法コース
 - 地域社会と文化コース
 - 42 3年次・4年次の学び
 - 43 夜間主紹介
- 45 経済経営学類
 - 46 社会で活躍する卒業生
 - 47 カリキュラムの特長
 - 49 学類長メッセージ・教員紹介
 - 50 活動ピックアップ
 - 51 経済学コース
 - 52 経営学コース
 - 54 コース横断プログラム
- 55 共生システム理工学類
 - 56 社会で活躍する卒業生
 - 57 カリキュラムの特長
 - 59 学類長メッセージ・教員紹介
 - 60 1年次の学び
 - 61 コース紹介
- 65 食農学類
 - 66 社会で活躍する卒業生
 - 67 カリキュラムの特長
 - 69 学類長メッセージ
 - 70 1年次の学び・教員紹介
 - 71 2年次の学び
 - 72 コース紹介
 - 73 2年次前期～3年次の学び
- 75 大学院
 - 77 キャンパスマップ
 - 79 フクニチャージ図書館・食堂・生協・年間スケジュール
 - 81 福大生が語る「福大キャンパスライフ」
 - 83 STUDENT'S LIFE
 - 85 クラブ・サークル活動の紹介
 - 87 就職・進路支援
 - 88 進路状況
 - 89 入試データ
 - 90 学費・奨学金

表紙 撮影協力

塙 章馬さん (経済経営学類 4年)	高林 桃子さん (経済経営学類 4年)
塚原 聖さん (人間発達文化学類 4年)	浅野 瑠愛さん (経済経営学類 4年)
照井 大稀さん (共生システム理工学類 3年)	渋谷 珠さん (共生システム理工学類 3年)

President
Message

地域と共に 21世紀的課題に 立ち向かう福島大学

福島大学学長 三浦 浩喜



福島大学は、福島県唯一の国立大学法人として、長きにわたり地域とともに歩みを進めてきた大学です。本学は、人間発達文化学類、行政政策学類、経済経営学類、共生システム理工学類、食農学類の5学類からなる総合大学で、各学類は、学問分野に沿って細分化されたコースで編成され、それぞれカリキュラムの下で学生が学び、専門性を深めています。

本学は学際性を重視しています。独自の「学類」制は、一般的な「学部」と比べてカリキュラムにより柔軟性を持たせることができます。他学類の授業を受講するなどして、今日強く求められている幅広いものの見方や多視点的な学びを得ることを目指しています。「問題解決を基盤とした教育」を理念とし、「解のない問いにチャレンジできる人材」の育成を目標に掲げています。今から12年前の東日本大震災、それに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故で、本学は発災直後から、避難所の開設と運営、県内外での学生ボランティア活動、地域の放射線の測定、被災地の実態調査など多面的に支援活動を行い、これらは本学の大きな財産となりました。

「問題解決を基盤とした教育」には、震災復興の様々な

活動で得た知見を教育課程に組み込んでいくと同時に、教科書の中に閉じ込められている知識を一方向的に教わるだけではなく、学生自らが複雑な現実社会に飛び込み、一人ひとりが自分なりのアプローチで問題を発見し、仲間とともに探究し合い、自分自身の生き方や社会のあり方を熟考してもらいたいという願いがこめられています。この理念を実現するカリキュラムとして、「地域実践特修プログラム」をあげることができます。これは、主として講義科目「ふくしま未来学入門I/II」とフィールドワーク科目「むらの大学」などの問題探究科目で学んだ事柄を、自主学修プログラムや各学類の専門科目に広げていく科目群です。大学の教室で、また、浜通りの被災地で、過疎化に直面している町で、様々な講師や現地の人々に学び、震災からの復興の歩み、地域の生の課題などを立体的に学ぶことができ、これを通して、新しい社会のあり方を考え実行するイノベーターの育成を目指しています。

もう一つの「グローバル特修プログラム」は、語学学習の強化、国際交流機会の提供、海外留学の支援などを通して、グローバル人材の育成を目指す科目群です。本学学生が、海外留学生の福島県内視察をサポートし、意見

交換・交流を行う体験型被災地学習「Fukushima Ambassadors Program (F.A.P.)」を行っており、福島の復興にも大きく貢献しています。

福島大学は、福島市南部の金谷川キャンパス内に全ての学類がまとまって設置されており、主として1、2年生が受講する基盤教育科目は学類を超えて多様な学生が授業に参加します。課外活動(部活動、サークル等)も盛んで、ユニークな活動に取り組む学生同士が出会い、そこからまた新しい活動が日々生まれています。本学は、開学以来学生の自主性を尊重する伝統が貫かれ、加えて、学生と教職員が互いに権利を守り、協力して大学を発展させる自治の精神が生きており、キャンパスの中には社会の多様性や自律性を考える機会がたくさんあります。大震災を乗り越えてきた本学は、12年を経ても様々な困難や課題に寄り添う姿勢が息づいており、今なお活発なボランティア活動にその片鱗を見ることができます。

さて、3年にわたって社会に脅威を与えてきた新型コロナウイルス禍が次第に遠のきつつあります。しかし、昨年2月のロシア軍によるウクライナ侵攻によって、世界の平和を維持するしくみが揺るがされ、政治や経済が大きく混

乱しています。国際社会における日本の在り方や位置づけも、変化の時代を迎えています。

東日本大震災は1000年に一度の大災害と言われ、新型コロナウイルスとの闘いは100年に一度の災禍、ウクライナ紛争は第二次大戦後最大の危機と言われていています。足元では、人口減少・少子高齢化、環境問題が深刻化しています。福島大学は困難を乗り越えて発展してきた大学、言わば「レジリエンス(復元力・反発力)の大学」ともいえます。「ピンチの時こそチャンスの時」、このようなきこそ、幅広いものの見方、深い問題意識、最先端の技術、それらを社会に実装する実践力等を身につけるべき格好の機会です。様々な困難に直面する時代に生まれ、成長する皆さんこそが、本学での学びを糧にして、これからの新しい社会を作る原動力になるものと確信しています。

「福島大学でしか学べないこと」がたくさんあります。本学での学びや経験は、よりよい自分自身のあり方、よりよい社会のあり方を実現する基礎となります。共に福島大学で学びましょう。

革新と協働で 様々な課題に取り組む

地域と共に在るために

東日本大震災、東京電力福島第一原発事故によってもたらされた様々な問題はもとより、人口減少や少子高齢化の問題は震災により10年早まったと言われています。東北を始め、これから日本全体で起こる社会の変容や問題に対応し、福島大学では地域の方々と共に地域の課題解決に取り組むのはもちろん、自治体や企業と協働してこれからの「新しい社会」を実現する研究に取り組んでいます。ここで学び、研究したことを社会に還元し、役立てること———それこそが福島大学がこの地に存在するゆえんです。

PICK UP

電子顕微鏡で米の構造を明らかにし、 農家と共により美味しい米を目指す。

副学長(学術情報・大学間連携担当)・食農学類 **新田 洋司** 教授
専門: 作物学、栽培学、熱帯農学

日本の米づくりは時代の要請や減反政策もあって、単位面積当たりの収量が多い品種から、高品質で食味の良い米づくりに方向転換してきました。私の研究室では、炊いた米を独自の方法と装置を使って加工し、電子顕微鏡でその表面や内部を観察します。それで美味しい米の構造や特徴がわかるので、農家の皆さんや自治体と連携し、良食味米を作るための品種改良や栽培方法に取り組んでいます。山形県の「つや姫」、福井県の「いちほまれ」などのブランド米の開発にも関わってきました。生産技術面はもちろんですが、未だに残る風評を払拭する科学的根拠を明らかにして、地域の方々と一緒に、より美味しい米づくりに取り組んでいます。

福島大学の食農学類は、農業の現場の課題に対応した研究を積極的に進めています。全国から集まった若手からベテランまでの教員・研究者が、国内・外で研究をリードしています。

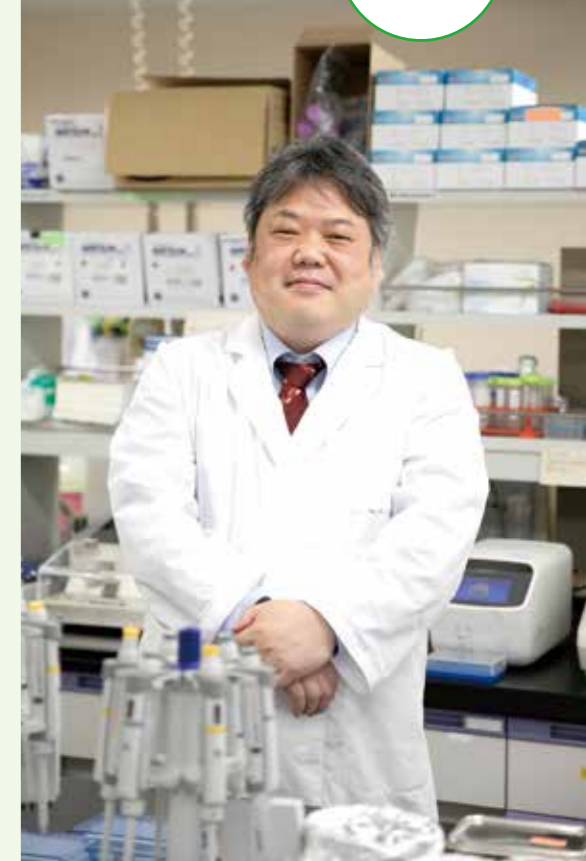
PICK UP

生き物の生き様や動きを DNA分析によって明らかに

共生システム理工学類 **兼子 伸吾** 准教授
専門: 分子生態学、保全生態学

私は基本的にDNAの分析屋なので、様々な生き物のDNAを調べる研究に取り組んでいます。例えば、ナナフシという翅をもたない昆虫の卵が、鳥によって分散されているという仮説をDNAのデータで検証しています。福島県内での研究としては、近年個体数を急増させているニホンジカがどこから入って来ているのかを特定したり、帰還困難区域で増加したイノシシと家畜ブタの交雑の状況なども調べたりしています。また、私は2012年に福島大学に来たのですが、地域の方々と話すうちに放射線が塩基配列に与える影響も誰かがやらないといけないと思い研究を始めました。シロイヌナズナというモデル植物への照射実験や帰還困難区域内の植物を対象に研究していますが、帰還困難区域内であっても放射線被ばくによる塩基配列の突然変異の増加はないという結果が得られています。

私は広島と京都を経て福島大学に来ました。西日本では珍しいカタクリがキャンパスに咲いていたり、クマガイソウの大群落が近くにあったり、自然の豊かさに驚きました。また、先生方が非常に協力的で、共同研究がやりやすいところが魅力です。



米の表面や内部構造から 品質や食味を解析

凍結乾燥した米をブラチナでコーティングし、電子顕微鏡で観察。粘りや弾力など美味しい米の特徴がわかる。



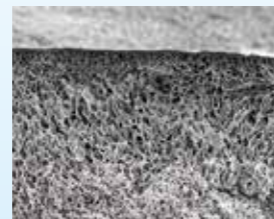
世界で唯一の 特殊乾燥装置

炊いた米を液体窒素で急速凍結し、この装置で凍結乾燥。新田教授が編み出した独自の加工方法。



2020年福島県産 「コシヒカリ」炊飯米の表面

典型的な良食味米の表面の構造です。表面では潮が糸状になって絡み合い、網目状構造になっています。少し奥の部分では、スポンジの穴のような多孔質構造が発達しています。これらの構造は、食べた際に、やわらかさ、なめらかさ、弾力をもたらします。



2020年福島県産 「コシヒカリ」炊飯米の表層部分

これも、典型的な良食味米の表層部分の構造です。上部の横に伸びている部分が表面で、薄い潮の層になっています。表面から下の部分(内部)では、スポンジの穴のような多孔質構造が発達しています。これらの構造は、食べた際に、表面的なねばり、やわらかさ、弾力をもたらします。



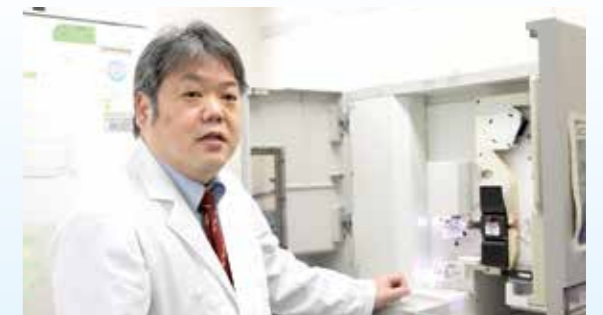
キャンパス内で採取された ナナフシの幼生

細い体で木の葉や枝に擬態するナナフシ。自然豊かなキャンパスには、ナナフシも生息しており、それを採取して研究します。



親が鳥に食べられても 卵は死なず分散する?

植物の種子のような硬い殻に覆われた卵。ナナフシは親が鳥に食べられても、親が持っていた卵は生きて排泄され、分散しているという仮説があり、それをDNAで検証しています。



地域の人たちと協働して環境や生態を守る

よく「これを調べてみませんか?」と声をかけられるという兼子先生。その分析力を用いて何かを明らかにしたいという方々の熱意やご縁を大事にして研究に取り組んでいます。

foR 福島県が抱える課題を解決へプロジェクト



福島大学では「福島での課題解決」に結びつく研究を、重点研究分野「foR プロジェクト」に指定しました。震災や原発事故による深刻な地域課題の解決に向け、研究が加速することが期待されます。

令和5年度 foRプロジェクト採択事業(4件) 3カ年計画の3年目

■脱炭素型エネルギーシステムの構築:水素をつくる・つかう技術の多様化

共生システム理工学類:大山 大(代表)、浅田 隆志
森林総合研究所:小井土 賢二
福島県立医科大学:田辺 真

■ゲノム科学・技術を援用した栽培・発酵好適性イネ系統の開発基盤研究

食農学類:松田 幹(代表)、松岡 信、小山 良太、藤井 力、高橋 秀和、吉田 英樹、菅波 真央、客員教授:北野 英己、吉田 晋弥

■福島型 STEAM 教育の開拓

人間発達文化学類:中田 文憲(代表)、新井 浩、初澤 敏生、渡邊 晃一、鳴川 哲也
共生システム理工学類:岡田 努、馬場 一晴

■官学連携による「住民参加型財政システム」の構築に向けた実証的研究 -人材育成に向けた「公共政策プログラム」の開設を通して-

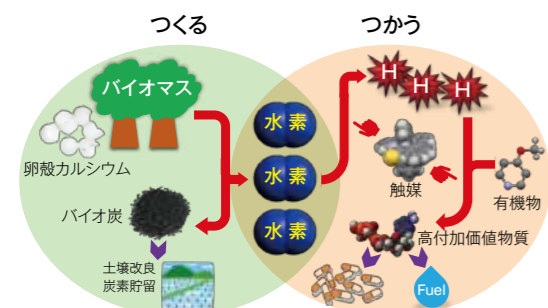
経済経営学類:藤原 遥(代表)、村上 早紀子
行政政策学類:岸見 太一
法政大学:林 嶺那

PICK UP!

◆脱炭素型エネルギーシステムの構築:水素をつくる・つかう技術の多様化

世界中の国々はカーボン・ニュートラルへシフトしています。日本でも、特に福島県は利用時にCO₂を発生しない「水素」という新エネルギーに注目し、全国に先んじて水素社会の実現に挑戦しています。私たちは、木材等の生物資源(バイオマス)から水素を製造する手法、製造した水素を化学原料として様々な物質へ導入する手法を研究しています。

プロジェクトの全体構想



●カーボン・ニュートラルに向けた水素の役割

- (1) 燃料・原料としての化石資源を代替する役割
- (2) 再エネ由来の電力余剰分あるいは未利用分を貯蔵する役割

●プロジェクトの目的

- 水素をつくる**: 現在、主流となっている水の電気分解による製造から、県内に広く分布する**バイオマス**を起源とした新たな水素製造法の開発
- 水素をつかう**: 現在、燃料電池として主に使われている**水素を化学原料**として導入し、高付加価値な工業原料に転換

水素をつくる

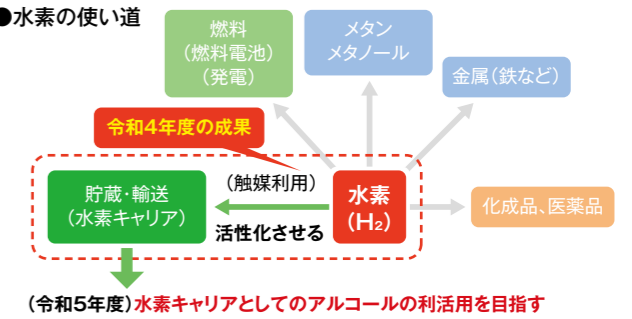
●炭化によるバイオマスからの水素製造

- バイオマス炭化の特徴**
- 炭化により**可燃ガス(水素、一酸化炭素、メタン等)**生成
 - 装置(炉)が**安価** ●可燃ガスと同時に**バイオ炭**も生成

- バイオ炭製造の意義**
- 燃料**や**高機能性材料**として利用可能
 - 農地**への施用
→温室効果ガスを吸収する取組みとして認証(J-クレジット制度)

水素をつかう

●水素の使い道



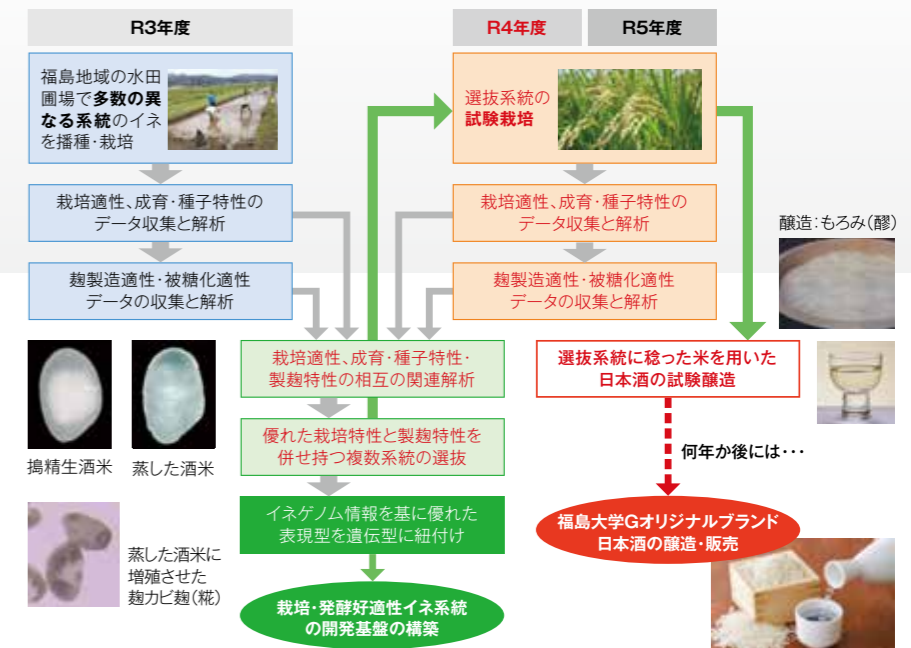
研究計画および今後の展開

研究体制	1年目(2021)・2年目(2022)	3年目(2023)	2024~
水素製造技術の開発(浅田G)	<ul style="list-style-type: none"> ●バイオマス炭化時の卵殻カルシウム添加効果の検証 ●生成ガスの定量評価(H₂、CO) 	<ul style="list-style-type: none"> ●卵殻添加バイオマスの炭化 ●熱分解時の炉内ガス雰囲気の影響検討 ●バイオ炭の農地施用に向けた炭素貯留効果推定と土壌改良材評価 	<p>1. 共同研究への展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ●大型予算の獲得(NEDO、JST、エネ庁、F-REI、県、企業) <一部進行中> <p>2. 水素研設置に向けた基盤構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国や県の水素関連政策への対応(水素基本戦略など) <p>2050年カーボン・ニュートラル実現へ</p>
水素利用技術の開発(大山G)	<ul style="list-style-type: none"> ●水素分子活性化に向けた触媒開発とプロセス解明 ●移動水素化反応による水素化 	<ul style="list-style-type: none"> ●可視光照射による水の直接分解反応: 高効率な水素生成反応の経路開拓 ●水の分解反応における水素生成効率向上と新規水素利用法の創出 	

◆ゲノム科学・技術を援用した栽培・発酵好適性イネ系統の開発基盤研究

研究対象とするイネ(米)は、麹カビ(*Aspergillus oryzae*)を生育させ酵素を作らせる(麹を製造する)ための優れた発酵素材作物です。本研究では、好適な発酵素材用米を開発するための学術基盤を構築することを目的としています。令和3年度は、生育の良好な早生の性質を持つ系統を中心に選抜して次年度の栽培に用いる種籾を確保しました。令和4年度は、その選抜有望株の酒米を用いて、純米吟醸酒の試験醸造を行いました。令和5年度は、今回の有望株を親株として次世代を栽培し、醸造特性に加えて栽培特性にも優れた系統を選抜してさらに改良を進めます。

また、ゲノム科学・技術を援用した開発基盤研究の成果として、イネの発芽を制御する遺伝子を突き止めたり、食味などを決定づける遺伝子の位置を効率よく特定する新手法を確立しました。



選抜有望株の酒米を用いた純米吟醸酒の試験醸造



日本酒の仕込み(醸造)

精米工程: 碎米等で特に問題は無し。
製麹工程: 親系統の製麹特性を保持(特徴が感じられる)。
仕込み(醸造): 溶けは良く順調に発酵が進む。親系統同様の「溶けやすさ」の性質も保持。

さわやかな
マスカットの香りと
キレのある味わい

解のない問いに
チャレンジ

自分を知る

自分自身のことを知る

福島大学が大切にしているものの一つに「自己の振り返り」があります。自分自身の長所や特徴を知ることが、学びと自立の第一歩だと考えるからです。自分はどんなことが得意なのか、特に何に関心があるのかを客観的に見つめることは、自分がどんな社会を創造したいのか、その未来にどんな方法で関わっていきたくのかに気づききっかけにもなります。

在学中は Semesterごとに学修目標を自分で設定し、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸びたかを「見える化」し、自己評価(振り返り)を行います。この一連のサイクルを4年間繰り返すことで、学びと自己研鑽を深化させ、自身の取り組むべき課題を発見することができます。



福島大学の教育



解のない問いに
チャレンジ

解のない問いに
チャレンジ

未来を考える

自分の、地域の、 世界の未来を想像してみよう

皆さんが「未来」を考える土台を形成するために、本学では高校までの学びと大学での学修をつなげる教育体系として、「基盤教育」を充実させています。大学で学ぶ上で必要な基礎能力を身につけるための「接続領域」、幅広い教養の基礎を形成する「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループ学修を通して解きほぐしていく「問題探究領域」を設定し、現状を分析する力や問題解決のための能力を丁寧に育みます。そして文系・理系を問わず、分析や問題解決のツールとしての基礎的な数学や理工学を理解し、社会に有益な知見を引き出すデータサイエンス教育にも力を入れています。

未来をつくるのは、皆さん一人ひとりの力です。自分が何をしたいのか、何ができるのか。地域や世界で、どんな未来を創造していくのか。福島大学でともに考え、学んでいきましょう。



解のない問いに
チャレンジ

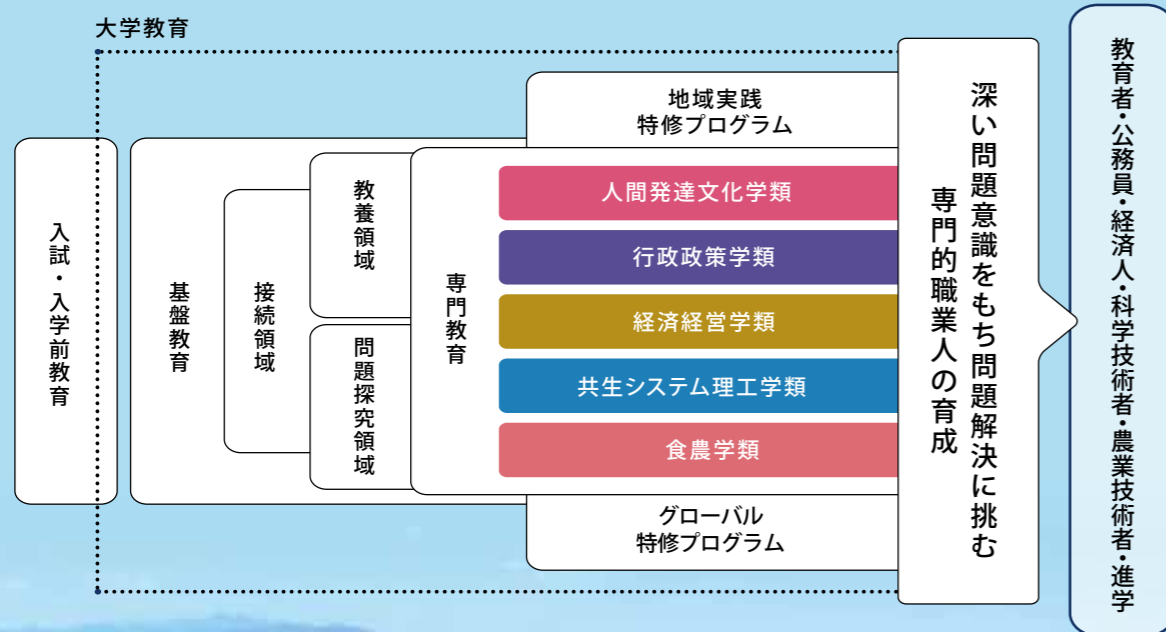
福島大学でしか 学べないことを学ぶ!

福島県は、2011年3月東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故に見舞われ、甚大な被害を被り、「Fukushima」は世界に知れ渡ることとなりました。

福島大学は東日本大震災以降、被災地のフィールドワークや地域おこし、自然再生エネルギー人材育成などに取り組み、ユニークな教育を進めてきました。

世界も、日本も、地域も、大きな変化の中にあり、たくさんの課題を抱え、容易に「答え」を導き出せない問題に満ちあふれています。福島大学は「解のない問い」にチャレンジする学生を育てる教育を創造します。

福島大学における教育体系のイメージ



1
入学から卒業まで、
手厚く教職員が
サポートします。



入学前教育—入学後のサポート—授業・学習—サークルやボランティア—留学などの各種活動—就職支援—卒業研究、などの4年間の学生生活を、一貫した体制でサポートしていきます。これによって、誰でも目標に向かって意欲的に大学生活を送ることができ、さまざまな活動にチャレンジできます。

2
情報教育を
実践的に
変えていきます。



現代の情報化社会にふさわしい教育体系に変えていきます。各自がパーソナルコンピュータを通して、学内外のさまざまな情報にアクセスし、情報の収集や分析、まとめ、プレゼンテーションを実践します。21世紀の読み・書き・算を身につけます。

3
初年次の
基盤教育を充実させます。



1年次生が学ぶ初年次教育(教養教育)は、本学独自の教育体系です。高校までの学び(教科書に書かれた知識を学ぶ)を大学での学修(自ら主体的に学ぶ)につなげる教育体系として「基盤教育」を充実させました。入学後、大学での学びを身につけるためのスタートアップとしての「接続領域」、幅広い教養の基礎を形づくる「教養領域」、現実の問題をフィールドワークやグループを通し、時には一人で、時には学生間で意見を交わし課題を深く掘り下げ、そして解きほぐしていく「問題探究領域」が設定されています。

4
地域に学ぶ活動を
強化します。



地域は多様な課題を抱えています。「地域実践特修プログラム」の「ふくしま未来学」を中心として、本学で学べる地域学習を広げ、地域の現状に触れ地域で活動する学習を増やし、問題探究・問題解決の力を伸ばします。

5
身につけた力を
「見える化」します。



科目や科目群の学習目標を明示して、どのような能力を伸ばすのか、どのように伸ばしたのかを情報技術を使って「見える化」します。アクティブラーニングや実践的な学習を取り入れ、学生の学びを活性化させます。

6
グローバル教育を
充実させます



学類を超えて、語学教育をグレードアップし、欧米圏やアジア圏との国際交流の機会や、海外留学を希望する学生にさまざまな情報や機会を提供します。

7
キャリア教育と
就職支援を
強化します。



本学で先進的に取り組んできたキャリア教育をさらに発展させます。自治体や企業との連携を強化し、インターンシップの機会や就職支援を充実させて、就職に強い人材、社会に出て魅力的な仕事ができる人材を育てていきます。

解のない問いに
チャレンジ

地域に学ぶ

授業の動画を
配信中!



地域実践特修プログラム

ふくしま未来学

— 福島だから学べること —

福島大学は「地域実践特修プログラム」を通じて、
未来を創造できる人材の育成と、原子力災害からの地域再生を目指します。
文系・理系の全ての学類が一つのキャンパスに集まる
福島大学ならではの特修プログラムです。



学生が身につける 6つの力

「地域実践特修プログラム」では次の6つの力の養成を目指し、
学習効果のデータ収集と、エビデンスに基づいた教育プログラムの改善を行っています。

※対象となる科目群の単位を取得することで修了と認定される本学独自のプログラムです。科目群の詳細などは、入学後にシラバスや学修案内を参照してください

1 地域を知り、関係性を築く力

地域の多様な価値観を尊重し、
多くの住民と関係性を構築する

2 地域課題を発見する力

複数のエビデンスに基づいて
地域の特徴や課題を分析する

3 地域を構造の中で考える力

地域を日本や世界の構造の中に
位置づけて未来を考える

4 地域を興す力

長期的視野で地域のための
活動を自ら企画・実行する

5 地域ネットワークを構築する力

地域でネットワークのハブとなり
積極的に協働する

6 地域を伝える力

媒体を駆使して地域の情報を
自ら継続的に発信する



多様な視点で学ぶ福島の「いま」と「これから」

講義「ふくしま未来学入門」

ふくしま未来学入門 I

5学類オムニバス講義で 復興の最前線を知る

2011年の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故は、人びとの暮らしに甚大な影響をおよぼし、今なお現在進行形の課題として私たちの前に存在しています。「ふくしま未来学入門I」は、地域とともに歩む総合大学・福島大学の特性を活かした、全5学類の教員によるオムニバス講義。人類が初めて経験する福島の諸課題に、それぞれの学問分野でどのような取り組みがなされ、学問知が実践知としてどのように活用されているのかを学ぶことで、多角的な視点と課題解決型の思考を養うことを目指します。そこで得られる力は福島に限定されず、今後世界が直面する様々な課題に応用可能なものとなるはずです。

ふくしま未来学入門 II

地域で活躍する ゲスト講師陣と考える課題解決

「ふくしま未来学入門II」では、復興の現場で活躍しておられる多彩なゲスト講師をお招きし、地域で実際に行われている取り組みについて具体的に学びます。震災と原発事故は人類の歴史に残る大きな出来事ですが、福島県内各地で多くの人びとの手によって取り組まれている復興と地域再生の歩みもまた、歴史に刻まれる力強いものです。その一端に触れることで、課題解決型の思考を養うとともに、自らの進路についても考える契機となります。

1年 復興の現場を繰り返し訪れ
学ぶフィールドワーク

地域実践学習 『むらの大学』



原発事故により避難を余儀なくされ、現在、復興と地域再生に取り組む地域(双葉郡川内村・大熊町、南相馬市小高区)を繰り返し訪れ、地域住民の方々との交流・調査(フィールドワーク)、そして地域の課題解決に向けた活動(サービス・ラーニング)を行う授業です。5月のガイダンスから1月の現地報告会まで、年間を通して学びを深めます。



2~4年 「むらの大学」で学んだ後は、
自分たちで実践!

自主学修 プログラム



1年次に「むらの大学」を履修した学生の多くは、2年次に「自主学修プログラム」として地域(双葉郡川内村・大熊町、南相馬市小高区)での活動を継続しています。自主学修プログラムは、学生が自主的にグループを組織してテーマ・内容を設定し、教員の指導のもとで学修することにより、単位が認定される制度です。多くの学生たちが、1年次に発見した地域の魅力や課題について「自分たちに何ができるか」を考え、自主的なプロジェクトを継続しています。

- 学生プロジェクト例
- 地域の特産品を使った六次化商品の開発
 - 菜の花キャンドルの製造とイベントでの活用
 - 災害公営住宅への定期的な訪問と交流
 - 子どもたちとのふれあいを通じた地域活性化
 - 祭礼やイベントの支援活動とアンケート分析
 - 働く女性へのインタビュー冊子編集…など



2~4年 学類の枠を超え、
活動を通して学ぶ

協働プロジェクト 学修



文系・理系の5つの学類が、一つのキャンパスで学ぶ福島大学。その特性を活かし、2年生以上を対象に「協働プロジェクト学修(学類を超えたプロジェクト学修)」を実施しています。被災地域の復興や地域再生に関わるプロジェクトを、学類の垣根を超えて実施することで、学生の専門性や地域問題の解決能力、他の専門性を有するメンバーとの協働力・学際性などを伸ばすことを目標としています。

- プロジェクトの例
- 農村地域居住における若者の選好の調査解析(飯館村)
 - 除染後農地の肥沃度低下調査と回復を考える(飯館村)
 - 農スポ@南相馬(南相馬市)
 - 南相馬市の特産物の高付加価値化を考える(南相馬市)
 - 除染廃棄物の中間処理を考える(大熊町)
 - 大熊町と営農再開:
復興に向けたストーリーを考える(大熊町)……など



全学年 地域を学ぶ、
授業外のスタディツアー

みらいバス



地域と大学をつなぐ「みらいバス」は、学生・教職員を対象とした日帰りのスタディツアー。授業以外で地域を訪問するきっかけをつくるため、年間10回程度実施しています。被災地域の訪問・見学やボランティア活動を通じ、それぞれの地域の現状を学びます。

- 過去の「みらいバス」
- 東日本大震災・原子力災害伝承館(双葉郡双葉町)
 - 震災遺構請戸小学校(双葉郡浪江町)
 - JFR大野駅および周辺市街地(双葉郡大熊町)
 - 中間貯蔵施設(双葉郡大熊町)
 - 川内村「かえるマラソン」ボランティア
 - 浪江町 田植え体験と住民協働ワークショップ…など



解のない問いに
チャレンジ

世界で学ぶ

国際交流

福島大学には、多彩な国際交流の機会が用意されています。
多くの留学生が在籍しているのも本学の特徴。国際交流は、キャンパスの中からはじまっています。

今の自分から、一步前へ パディ制度

活動期間：数日～6ヶ月程度

海外に留学してみたいけど不安がある。身近な場所で語学力を試したい。そんな皆さんに対応できるよう、福島大学には学生交流協定校から来る交換留学生・短期留學生達のサポートをする「パディ」制度があります。パディとして留學生達と関わることで、彼らの文化を直接感じ、福島に在りながら国際交流ができます。グローバル人材へのファーストステップとして貴重な機会となります。



多彩なプログラムで世界を学ぶ 短期研修・演習

開催期間：10日～3ヶ月

長期休暇を利用して行う短期研修・演習では、海外の協定締結大学で語学を学んだり、フィールドワークを体験することができます。例えば、コロラド州立大学ではアメリカの放射線研究について学ぶことができます。このほか韓国、中国、台湾、カナダ、ドイツでの語学研修など、多彩なプログラムが用意されています。



協定締結校への長期留学 交換留学

開催期間：半年～1年

本学は、大学間交流協定に基づき、海外の35大学と学生交流協定を締結し、「交換留学」を実施しています。「交換留学」とは学生交流協定校への長期留学で、福島大学にのみ学費を納める必要がある留学を指します。国際交流センターが留学先との調整役を務めるので、留学の準備から留学中の相談、帰国後の単位の互換まで、さまざまな手続きも安心して行うことができます。



海外で働くために必要なことを学ぶ 海外インターンシップ

開催期間：約2ヶ月

2016年度からスタートした海外インターンシップ講座「WEA」は、「実際の現場で英語を使うことにより実用的な英語を身につける」がテーマです。海外で仕事をするには何が必要なのかを考えながら、海外で働くためのスキルや知識を学びます。その後、夏休みに渡米して、現地でインターンシップを行います。

例 Real English Business Internshipプログラム(テキサス・ヒューストンでの8週間のインターン)など



専門家の指導も受けられる 語学力強化

開催期間：毎日(月曜～金曜)

英語圏への交換留学などをを目指す学生に求められるのが、IELTSTMやTOEFL[®]などの語学試験で目標スコアをクリアすることです。福島大学では、少人数制の語学力強化プログラムや、語学試験のコーチングで語学力アップをサポートしています。中でも国際交流センターが提供する「C1 Project」は、語学試験対策の専門家によるきめ細やかな受験指導に人気を集めています。



奨学金制度について

「留学の費用に不安がある」という方も安心してください。福島大学には経済的な負担軽減を目的とした給付型の奨学金制度が準備されています。2022年度は、交換留学、短期研修、海外インターンシップに参加したすべての学生が奨学金を受給しました。

詳しくは、国際交流センターにお問い合わせください！

世界は広く、様々な視点や考え方があります。
留学はそれを体感するチャンスです。

食農学類 生産環境学コース 3年
[日本大学東北高等学校出身]

熊澤 帆夏さん

留学先 中東工科大学(2022年9月～2023年6月)



中東工科大学は理系の学生が比較的多く、トルコでトップレベルの国立大学です。授業は全て英語のため、交換留學生でも自分の専門や興味に沿った授業を履修することができます。食農学類では主に生態系と農林業の関係を学ぶ一方、こちらでは生態系の授業に加え、進化学や植物生物学なども学んでいます。

留学は高校の頃からの夢で、一番の目標は様々なバックグラウンドを持つ人々と関わり、自分の視野を広げることでした。ここには先進国から発展途上国までの学生が集まっており、その方達との会話を通して、様々な側面から物事や

社会問題を考察することができるようになりました。現在はキャンパス内の寮で暮らしており、生活のほとんどは英語ですが、街に出ると基本トルコ語なので、この7ヶ月で授業や友人から学んだ言葉を駆使しています。福島大学に戻った際には、こちらで学んだグローバルな生態系における課題等も念頭に置き、福島や日本において自然と人間の関係性をよりよくするために学んでいけるのではないかと思います。また所属している国際交流サークルでは、留學生と日本人の学生の輪を更に広げ、仲を深められるようなサークルづくりをサポートしたいと思います。



大学内で留學生の友人と



イフターディナーに参加



アンタルヤの地中海にて

Fukushima Ambassadors Program

Fukushima Ambassadors Program(通称F.A.P.)とは、アメリカ、ドイツなどの海外の協定大学から福島に関心を持った留學生(これまで延べ209名)を約2週間のプログラムに招き、福島大学の学生とともに被災地をまわる短期留学プログラムです。2023年4月現在、福島大学を中心に600名以上の県内の大学生がプログラムアシスタントとして参加してきました。さまざまな背景を持つ学生たち同士が、ともに英語で福島の「過去」、「現在」、そして「未来」の課題について学び、理解を深めています。



Fukushima University International Center

国際交流センター

平日 9:00～12:30 / 13:30～17:00



福島大学国際交流センターは、国際交流の窓口として学生の皆さんのサポートや、情報発信を行っています。ここでは、本学と学術・学生交流協定を締結している大学の情報や、留学の報告書なども閲覧することができます。また留学や語学学習に関する図書の出借や、希望者には語学試験対策学習指導も提供しています。留学に関わる生活や学習の相談、在留資格、地域のイベント案内、手続きなどもここで確認することができます。



オンラインで留学生と一緒に学ぶ

国際共修 (ICL)

言語や文化が異なる背景を持つ学生同士がそれぞれ違いを受入れ、相互理解を深めあう学修活動を国際共修(Intercultural Collaborative Learning)といいます。連携加盟大学(東北大学、福島大学、東京外国語大学、信州大学、大阪大学、神戸大学)が提供する特色のある科目を、オンラインで受講することができます。履修したICL科目は、福島大学での単位として認められます。

ICL科目履修者の声



異文化に触れ、より広い視点や考え方を学ぶチャンス

人間発達文化類 卒業
[東京都立本所高等学校出身] **大和田 諒さん**

国際交流に興味があり、英語も磨き上げたいと思い履修しました。異文化交流を目的に、コロナやウクライナ侵攻など時事的な題材を取り扱い、日本人学生と留学生とで学び合うアクティブラーニングを取り入れた授業です。ウクライナ出身の方に現地の状況を伺ったり質問するなど貴重な機会もありましたし、基本的には日本語でしたが、留学生の方がわからない時には私がサポートする機会が多く、それをきっかけに一緒に出かけるなど、交友関係も広がりました。また授業を通じた異文化の学びから、他者の視点や考え方を受け入れる自分のキャパシティが広がりました。卒業後は住宅系の会社に就職しますが、将来的には海外との交流に結びつく事業展開をマネジメントする立場になればと思っています。



英語を学ぶだけでなく英語で学びたい人のために

行政政策学類 地域社会と文化コース 3年
[新潟県立燕中等教育学校出身] **岩間 弓菜さん**

私は中高一貫校で英語には積極的に取り組んできたのですが、最初は躊躇することもありました。でも話さないと学びにならないので、後半は積極的に発言するようになりました。週1回、定期的にしっかり英語を話せる環境に身を置けることがとても嬉しく、楽しい時間でした。

これまで2つの授業を受け、自分とは異なるバックグラウンドを持った方々とどう接していくか考える「異文化交流」、もうひとつは人権教育に関することでした。ドイツ、イギリス、ポーランド、中国などからの留学生たちとその問題や解決策を一緒に考えました。私は人権や労働問題に興味があるのですが、ニュースなどを見る時にもこの授業で聞いた話を参考にしながら、もっと社会問題に向き合っていけたらと思います。

世界に通用する英語を学ぶ

C1 Project

国際交流センターでは、英語圏の大学での学修や大学院での研究に必要な4技能を徹底的に鍛える、インタラクティブな自主学修プログラム科目「C1Project」を提供しています。C1 Projectでは、CEFR(ヨーロッパ共通参照枠)のC1レベル(英検1級に相当するレベル)の語学試験のスコア取得を目標に、世界に通用する英語力を日々鍛えています。これまでC1 Projectを履修しC1を達成した学生の中には、卒業後に海外の大学院に進学した先輩もいます。

C1 Project履修者の声

英語力とともに手に入れた、もっと上へという自信

経済経営学類 卒業
[仙台市立仙台高等学校出身] **杉浦 矢功正さん**

留学しなくても英語力を伸ばせることを実感し自信に繋がりました。これなら専門領域ももっと伸ばせるし、大学院ももっと上を目指せるのではないかと希望が持て、自分で決めてしまっていた限界を突破できました。まず英語力を確実に伸ばし、オンラインでガム大学の会計の単位を取り、米国公認会計士の試験を受け、そして大学院へと、一つひとつ積み上げていきました。将来は会計士か財務コンサルタントとして、企業の繁栄を通して地域や国の成長に役立ちたいと考えています。



より高みを目指す仲間たちとの刺激的な時間

経済経営学類 卒業
[群馬県立前橋商業高等学校出身] **佐々木 駿さん**



英語ができればキャリアが広がると考え、交換留学制度を目標に1年の夏からC1 Projectに参加しました。1年の最初に受けたTOEICのスコアはかなり低かったのですが、授業後は閉館まで図書館に籠るなど学習を継続するうちに、留学の目安にしていたIELTS™のスコアが取れました。何よりC1 Projectにはレベルも質も高い人たちが集まっているので、その刺激的な環境に身を置けたことが大きかったと思います。ここで出会った友人たちとは、メルボルン大学院進学後も繋がっていけると嬉しいです。

英語の学習を通して論理的思考を手に入れる。

共生システム理工学研究科
博士前期課程 1年
[福島県立会津高等学校出身] **長岡 瞬さん**

大学の授業は受動的なものが多いかもしれませんが、C1 Projectは主体的・能動的に意見を発言したり、表現することが求められるので、脳みそから汗が出るような、疲れるけれど楽しい時間でした。4技能のうちリーディングがメインですが、ライティングでは講師の方に1対1で表現や内容を指導していただき、英語の学習を通して、論理や筋道を立てて考える力が身に付きました。自分の専攻では英語の論文を読む機会も多いですが、英文に対しての抵抗がなくなったので、これからの研究でも役立つと思います。

